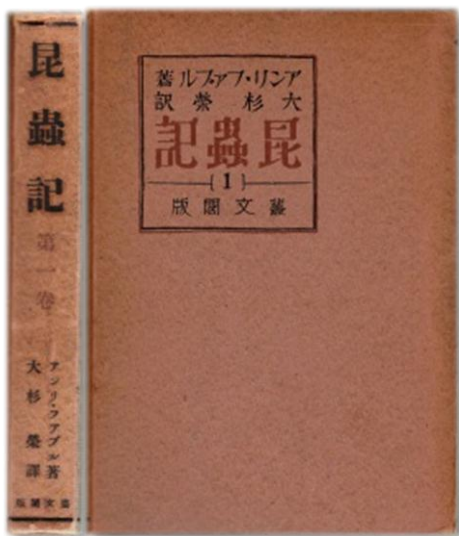


# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第12号

(2013年4月)



北光クラブ  
自然観察クラブ

## 訳者の序

これはファブルの名著『昆虫記、昆虫の本能と習性の研究』10巻 (Souvenirs Entomologiques. Etudes sur l'Instinct et les Moeurs des Insectes. Dix series) 中の第1巻を翻訳したものだ。

僕は主として其の原文に拠りながら、所々英訳を参照して見た。英訳はロンドン動物学会会員アレキサンダ・テキセエラ・ド・マトス (Alexander Teixeira de Mattos) の筆に成る。いい翻訳だ。1912年にメテルリンクの序文付で『蜘蛛の生活』を出して以来、1922年即ち本年までに『何んとかの生活』、『何んとかの生活』と題して12冊の訳本を出している。原書は著者の研究が出来あがった順序のまま書いて行ったのだが、英訳者はそれを同じ種類の虫に分類し直して訳したのだ。そして原書の10巻が英訳の12巻になったのだ。最初の『蜘蛛の生活』はロンドンから出たが、どうした都合か、其後はそれも一緒になって皆なニューヨークから出ている。

ドイツ訳では、もう大分古い頃に、『コスモス』と云う通俗科学雑誌に連載されていたのを見たが、それが本になっているかどうかは知らない。

最初僕は英訳に従う方が読者のために都合がいいと思った。何故なら、1冊の本の中に同じ種類のいろんな虫の事が纏めて書いてあるのだから。そして著者も、其の研究の順序に従って書いたとは云え、やはり出来るだけは同じ種類の虫をだんだんに追って行っているのだから。

が、其後僕は、1919年即ち一昨々年に、(著者の序文には1914年と云う日付はあるが)『絵入確定版』(Edition definitive illustrée)と云う新版の原書が出た事を知った。そしてそれを手にすると直ぐ、英訳の順序に拠ろうと云う考えを全く棄てて了った。其の新版には、著者の序文の中にもある通り、実に綺麗な写真版がうんと載っているのだ。そして其のほかにも猶、小さなカットが沢山載っているのだ。

僕は此の挿絵をどうしても入れたいと思った。それ以前の原書の諸版(僕の持っている

(次ページへ続く)

のは 1920 年の第 23 版だが) にも、又英訳のどれにも、此の小さなカット 1 つ載っていないのだ。そして新しい確定版は、年 4 冊発行の筈のが、戦争に邪魔されて、今まだ漸く其の第 4 巻までしか出ていない。

で、僕は其の『確定版』に拠った。此の第 1 巻は、英訳の『糞虫』の一部と、『狩人蜂』の殆んど全部と、『左官蜂』の一部分とがはいっている。

2、3 年前に、僕は『科学の詩人』と題して、ファブルの短い評伝を書きかけた事があった。ほんの書きかけだから、どこにも発表はしなかったが、次ぎにそれを利用する。

——今僕はファブルの『昆虫記』10 巻の翻訳を思っている。

——実は 4、5 年前からファブルを読みたいと思っていたんだが、暫く獄中生活をしなかったので、其のひまがなかった。去年の夏、ちょっと市ヶ谷の未決監にはいった時、神田に三才社と云うフランス書専門の本屋があるが、そこにファブルの『昆虫の生活』(La vie des Insectes) や、『本能の不可思議』(Merveilles de l'Instinct chez les Insectes) や、『昆虫の習性』(Moeurs des Insectes) なぞのあったのを思いだし、獄中から手紙を出して買わしにやったが、相憎く売りきれていて 1 冊もなかった。

——其後保釈で出て、其の年の暮れに、いよいよ既決監にはいるとする前の日、或る友人から金を貰って丸善へ行った。そして、こんどは刑期も短いだし、それに冬の寒い間でもあるのだから、なぐさみ半分に旅行記でも読んで来ようかと思って、そんな方面の本を探していた。クロポキンで友人で、と云うよりも寧ろ先輩の、やはり無政府主義者で地理学者であった、エリゼ・ルクリュの『新万国地理』第 7 巻『東部亜細亜』と云う大きな本が偶然に見つかった。其他にも、デアウインの『一博物学者の世界週遊記』だの、ウオレスの『島の生物、動植物の世界的分布』なぞがあった。3 ヶ月間、3 畳敷ばかりの独房におしこめられながら、こんな本で世界中を遊び廻るのも面白かろうと思っているうちに、偶然又、ファブルの『昆虫の生活』に出遭った。そして、そんな本を 20 冊ばかり抱えて、中野の豊多摩監獄へ行った。

——ところが、はいると直ぐ、丸善の新作本の中にあつたからと云って、ファブルの英訳書が 5 冊差入れになった。

——『昆虫の生活』は『昆虫記』10 巻の中からの抜粋で、ファブルが最も苦心して研究したいろんな糞虫の生活が其の大部分を占めていた。

(次ページへ続く)

——糞虫と云うのは、1種の甲虫で、牛の糞や馬の糞や羊の糞などを食っているところから出た俗称だ。糞虫が、そう云った糞を丸めて握り拳大の団子を作って、それを土の中の自分の巣に持ち運ぶ、其の運びかたの奇怪さ！ 又、一昼夜もかかって其の団子を貪り食って、食う尻から尻へとそれを糞にして出していく、其の徹底的糞虫さ加減！ そして又、やはり其の団子で、自分が死んだあとでの卵の餌食を作って置く、其の造りかたの巧妙さ！ それにファブルの観察や実験の仕方の実に手に入ったうまさ！ 描写の詳密さ！ 文章の簡素雄渾さ！ 読み始めると、とても面白くて、世界漫遊どころではない。とうとう、ほかの本はあと廻しにして、『蟋蟀の生活』（The Life of the Grasshoppers）や、『糞虫』（The Sacred-Beetles）や、『左官蜂』（The Mason-Wasps）や、『本能の不可思議』（The Wonders of Instinct; Chapters in the Psychology of Insects）などを読み耽った。

——此の最後の『本能の不可思議』のほかは、皆なロンドン動物学会会員アレキサンダー・テキセラ・ド・マトスの翻訳で、マトスにはまだ其のほかに、『蜘蛛の生活』（The Life of the Spider）や、『蠅の生活』（The Life of the Fly）や、『木苺蜂其他』（Bramble -Bees and others）や、『狩人蜂』（The Hunting-Wasps）や、『毛虫の生活』（The Life of the Caterpillar）などがある。『本能の不可思議』はマトスとバアナド・マイアルの合訳だ。此のマイアルには猶、『昆虫の社会生活』（Social Life in the Insect world）の訳がある。其の『不可思議』と『社会生活』とは、いづれも『昆虫記』10巻の中からの抜粋で、仏文の『昆虫の生活』などと同様に、綺麗な絵入りになっている。

——此のファブルの事は、嘗つて賀川豊彦君が、『ファブルの生存競争の研究』と題して、雑誌『科学と文芸』で紹介し、後それを其の論集『精神運動と社会運動』の中に収めた。又、同君の友人だと云う英義雄君が、『蜘蛛の生活』を翻訳して、洛陽堂から出版した。

——賀川君の紹介は、生存競争の否定と云う事を中心にしたために、十分ファブルの全体に亘る事が出来なかった。又、Fabreをわざわざ Fabré と書いてファブレと読みましたり、Souvenirs Entomologiques をサベニーア・エンテモロギーなどと変な英語読みにしたところが、何んでもない事のようにはあるが、いやに気になった。が、とにかく賀川君はファブ

（次ページへ続く）

ルを此の日本の国に紹介した最初の人だ。英君も賀川君から其の話を聞いて読み出したのだそうだ。僕も賀川君には『昆虫の社会生活』を借りた恩がある。

——英君の翻訳は、誤訳の有無はどうか知らないが、随分まづいものだ。書いてある事柄の面白さで、漸く引きずって行かれる程の、実に生硬極まる訳文だ。其のせいでもあろうか、惜しい事には、余り読まれていないようだ。

——英文では、『科学の詩人ファブル』（Fabre, Poet of Science）と題した、フランスのルグロ博士原著マイアル訳の評伝がある。又、『昆虫学者ジャン・アンリイ・ファブルの生涯』と題した、フランスのオオギュステン・ファブル原著マイアル訳の評伝がある。

——ファブルとはどんな人か、と云う事を一言で云うには、フランスのいろんな批評家の言葉を其儘持って来るのが、一番世話がない。

——アンリイ・ファブルは、今文明世界が持っている至高至純の名誉の一つ、最も賢明な博物学者の一人、又近代的意味でのそして本当に正当な意味での最も靈妙な詩人の一人だ……

それは私の生涯の中の最も深い欽仰の一つである。

——モオリス・メテルリンク——

——『昆虫記』は、久しい以前から、私を此の魅力のある、深い天才と親ませてくれた。私は此の本に、どれ程の、楽しい時間を負っているか知れない……

此の大科学者は、哲学者のように考え、美術家のように見、そして詩人のように感じ目つ書く。

——エドモン・ロスタン——

——彼れの天才的な観察の燃えるような忍耐は、芸術の傑作品と同じように、私を狂喜させる。私はもう幾年か前から、彼れの本を愛読している。

——ロメン・ロオラン——

——『昆虫記』は、最も下等な生物の中にすら不可思議な力のある事を、吾々に示すものである。そして此の比類のない著者は、同時に又、物を知りたいと云う渴望、物を学びたいと云う熱情、即ち美が吾々に与えるのと同じ高尚な享楽と深い逸楽とを、吾々に感じさせる。それは自然のバイブルだ。

——ジョルジ・ルグロ——

(次ページへ続く)

——又、ダアウインは嘗て、彼れをただ一言、しかし千金の重みを以て、『此の比類のない観察家』（That incomparable observer）と激称した。

——が、僕は、『哲学者のように考え、美術家のように見、そして詩人のように感じ且つ書く』と云った、エドモン・ロスタンの言葉が一番気に入った。

僕が前に『科学の詩人』と題して書きかけたと云うのは、これっきりで尻きりとんぼになっている。

ファブルの生涯は、彼れが長い間文字通り一緒に生活した其の昆虫の記録の中に、即ち『昆虫記』の中に、あちこちに織りこまれている。彼れは昆虫を語りながら同時に彼れ自身をも語るなければならない程、其の生活が互に入り混っていたのだ。

其の生涯に就いては、僕は又新しく『科学の詩人』と題して、近く単行本として発表したいと思っている。

ファブルは又、此の『昆虫記』のほかにも、20冊ばかりのごく平易で、そして面白い通俗科学の話を書いている。そして僕は今、いろんな人との共訳で、其の翻訳にとりかかっている。

僕は今漸く此の1巻を翻訳し終った。第2巻は本年中に終りたい予定でいる。そして続いて猶第3巻第4巻と進んで行くつもりだ。旧版は10巻だったが、新版ではもう1巻ふえて、其の第11巻にはルグロ博士の手になる総索引と、ファブルの書簡集と、ファブルの伝記とがはいる筈だそうだ。

1922年8月22日

大杉 栄

※ 表記は読みやすさを考慮して適宜手を加えてあります。

なお『昆虫記』本文の一部と、翻訳者大杉栄についての簡単な紹介を

12・13ページに掲載しましたので、ご参照ください。



## 武州高尾山ハイキング

～早春の草花、暖地性の樹木、薬王院を訪ねて～

3月31日（日） 天気・霧時々小雨

幾度確かめても「雨」との天気予報に一度は中止を考えたのですが、ぜひ行きたいという声もあり、曇天の早朝、JR 鹿沼駅前に集合したちょうど 10 名で、「青春 18 きっぷ」を購入して出かけました。子どもはたまたま同じクラスの 4 年生が 3 名です。小山からは、高尾まで直行できる「ホリデー快速河口湖号」に乗れました。窓の外はどこもサクラの花盛り、車内でまずゆったりと 2 時間弱の花見です。

JR 高尾駅北口からバスに乗り、小仏手前の山里から城山に向かいます。高尾山に裏側から登るコースです。悪天候のためルート変更して、山頂までほぼ舗装された日影沢林道を進みながら、足元の小さな花から、目の高さの灌木の花、頭上のまだまばらなサクラなど、いろいろな植物と出会えました。湿った岩陰からはカエルの唸るような声も。

城山山頂は霧の中で人影もまばら、咲き始めたサクラの下、辛うじて開いていた茶店をほぼ独占の形で昼食を楽しみました。座っていると寒さが身に染みてきます。気温僅か 5℃！

高尾山までの登山道は、雨の合間に大勢の人に踏まれた泥んこの道で、滑ったり靴を取られたりの難路に再び汗が滲みます。

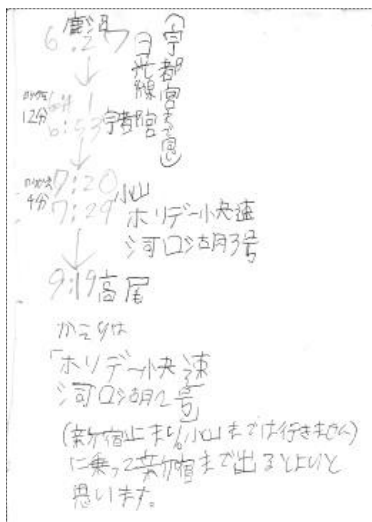
好天なら花見客や登山客でいっぱいのはずの東京名所・高尾山頂も、この天気では閑散としていて、売店が早めの店じまいを始めるところでした。朱塗りの建物が連なる薬王院を抜けて、ケーブルカー乗り場へ向かいます。

下へ降りて、周辺の門前町で菓子店など冷やかし、一服ごちそうになった後、帰途に就きました。

帰りは都心に向かい、上野から「快速ラビット号」に乗車。混んでいて席は十分に取れませんでした。子どもたちは元気、山道でへこたれていた子もはしゃいでいます。たくましき新 5 年生たちです。夜 9 時過ぎの鹿沼到着となりましたが、皆元気で解散となりました。

天候のために実施を躊躇した山行でしたが、大した降りにもならず、いろいろな点で逆に幸いした道中でした。

(北光クラブニュースNo.1 2 5 掲載)



←4年生の佐々木伸二君が  
電車の行程を計画してくれました  
頼もしいテツの卵？



霧の中の高尾山頂  
2等三角点を前に

※ 参加者

佐々木伸二、鈴木若菜、平井垂湖・祐子、井上哲男、山口龍治、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき (計10名)

※ 咲いていた山野草の花(下線はスマレの仲間)

アズマイチゲ、エイザンスミレ、エンレイソウ (写真左)、カントウタンポポ、クサイチゴ、コカンスゲ、コチャルメルソウ、シロバナスマレサイシン、センボンヤリ、タチツボスマレ (写真中)、ニオイタチツボスマレ、ニリンソウ、ハナネコノメ、ヒナスミレ (写真右)、マムシグサ、マルバスミレ、ミツバツチグリ、ヤブジラミ、ヤマネコノメソウ、ユリワサビ、





✿ 咲いていた樹木の花(下線はサクラの仲間)

アセビ、アブラチャン、ウグイスカグラ、  
カンヒザクラ(植)、キブシ、コブシ、  
シキミ、ジュウガツザクラ(フユザクラ)  
(植)、ソメイヨシノ(植)、マメザクラ、  
ミツマタ(植)、ミヤマシキミ、  
モミジイチゴ、ヤブツバキ、ヤマザクラ、  
ヤマブキ



アブラチャン、谷一面黄色に染まる



ウグイスカグラ、目立たないがきれいな花



ジュウガツザクラ、秋から少しずつ咲き続ける



キブシ、方々にぶら下がる早春の顔



コブシ、早春の山の彩り



マメザクラ、色が濃い



モミジイチゴ、実は秋の山の味覚

✿ その他の樹木(このほかにももちろんたくさんありますが…)

アカガシ、ウバメガシ (写真左)、ウラジロガシ、カツラ (写真中)、フサザクラ



✿ 見られた鳥・聞こえた鳥

ウグイス、ウソ、エナガ、キジバト、コゲラ (上右写真)、シジュウカラ、メジロ、ヤマガラ

✿ 拾った貝殻

チャイロヒダリマキマイマイ、ヤマタカマイマイ

✿ 写真で振り返るあれこれ



←小山から高尾へ直行！



日影林道→

城山山頂までこんな道が続く



城山山頂茶屋のおでん



帰りの快速ラビット号車内で  
仲よし3人組？

## 山口さんの自然講座

### カタツムリと蔓植物の巻き方について

高尾山ハイキングで、チャイロヒダリマキマイマイの殻を見つけたので、途上この解説をしたが、うまく伝わったか分からないので念のためもう一度述べてみたい。

カタツムリの「カタ」(渦)は陸のことで、「ツムリ」は巻き貝である。デンデンムシの「デンデン」は、デンデン太鼓の丸い形に因むという。ところが、この呼び名は和名にはない。すべて何々マイマイである。

巻いているからマイマイであり、マイだけでもしっくりこないし、マキマキではイメージが悪い。マイマイとは実にうまく名付けたものだと感じる。殻の口が左側だと左巻きで、右側であれば右巻きとなっている。

これは蔓植物の巻き方も同じだ。フジは左下から右上へと巻き上げていく。ヤマフジはその逆である。

かつて、左下から右上へと巻き上げるのは左巻きではなく、これは右巻きじゃないのという意見が出た。植物には巻き方で付けた名前はないので、巻き方の説明はすぐに変更されたが、カタツムリは巻き方が名についてしまっているから、そうはいかない。動植物の名は、発表して登録されると、ふさわしくない名であっても変えることはできない。そのため、昔の説のままである。巻き貝は陸産、海産とも、カタツムリで言う右巻が多いからである。黒い帯(色帯・しきたい)についても、思い出していただきたい。これは、すべてのカタツムリに共通しているので、名前が分からなくても、これは何型かなと見てみるのも面白いと思う。

(山口龍治)



## 春の自然観察ハイキング

～田んぼの草花、里山の樹木、水生植物～

それはこんな顛末であった。私達は5人から6人かいた。私は一番年長で、皆んなの頭ではあるが、それよりもっと皆んなの仲間であり友達であった。皆んなは熱情のこもった、にこにこした空想に充ちた、そして知識欲を湧き立たせる青春の血の漲った、青年であった。みちみちいろんなお饒舌りをしながら、接骨木(にわどこ)や山楂子(さんざし)が縁どっている小径を歩いて行った。そこにはもうはなむぐりが、それらの繖房花の上で、苦い香りに酔っていた。私達はスカラベ・サクレ(金亀子(こがね)の1種、Scarabée sacré 英 Sacred beetle)がもうレザングルの砂地の高原に現われて、古代エジプト人にとっては地球の像(かたち)であったところの、其の糞玉をころがしているかどうかを見に行っただ。丘の麓の流れには其の透きガラスの敷物の下に、珊瑚の小枝のような鰓の若い蝶鱗(いもり)を隠していやしないか。小川に住むあの小さな華奢な魚の蕨魚(とげうお)がもう其の藍と緋の婚姻のスカーフをつけたか。まだ来たばかりの燕が、飛びながら卵を播いて行く蚊とんぼを追いながら、其の尖った翼で牧場をかすっていないか。砂岩の窪んだ穴の敷居に、眼の玉のような斑のある蜥蜴(とかげ)が、青い斑点を撒き散らしたからだを日向ぼっこさせていやしないか。卵を産みにロオヌ河を遡って来る魚の群を追うて海からやって来た笑い鷗(う)が、時々氣違いが笑いこけるような叫声を出しながら、群を

なして河の上を飛んでいるか。どうか見に行っただ。それから又、いやもうこれで止そう。そして一言に云えば、虫けら共と一緒に暮らすのを非常な喜びとする単純で無邪気な人間共である私達は、春の生の眼ざめと云う、筆紙には尽す事の出来ない饗宴に一と朝をすごしに行っただ。(以下略)

ジャン=アンリ・ファブル著 大杉 栄訳『昆虫記』

昭和10年4月18日 叢文閣発行

復刻版 2005年12月25日 明石書店発行



今年度最初の例会は鹿沼学舎（鹿沼を学ぶ人たちの集まり）主催の「春の自然観察会」に参加して、私たちの身近にある草花や樹木を観察してみましょう。まず喜久澤神社に参詣し、ツクバネガシ、イタヤカエデ、ミズキなどの古木を訪ねます。それから見笹霊園下の駐車場に戻ってハイキング出発。前半はハコベ、ナズナ、コオニタビラコ等、田んぼの草花、黒川沿いに歩いてヤマザクラ、クロモジ、アケビ、モミジイチゴ等里山の樹木を観察します。板荷駅あたりまで行ければ吉良堀の流れの中に、バイカモを見ることができるとも思えません。ニワトコが縁どっている小径を歩いて、イモリやヤマアカガエルを隠しているかもしれない小川をのぞいてみませんか。新1年生もふるってご参加ください。

日 時：4月14日（日） AM8:20 北小西門集合（解散はPM2:00頃）

行 程：北小——見笹霊園下の駐車場（見笹石材店そば）——喜久澤神社——

見笹霊園下の駐車場……用水路（昼食）……下遠部橋……川化橋……

板荷駅裏——北小

服 装：帽子、長袖シャツ、長ズボン、軽登山靴または運動靴、防寒着

持ち物：リュックサック、レジャーシート、雨具、ポット、お手ふき、

タオル、ちり紙、筆記用具、レジ袋、お弁当、おやつ

あと便利なもの：双眼鏡、ルーペ、カメラ、植物図鑑

会 費：大人100円、子ども50円（資料代）、保険料800円（1年分）

問合せ：自然観察クラブ 阿部（090-1884-3774）

大正期に生きた著名な社会運動家でアナーキスト（無政府主義者）の大杉栄（1885-1923）は、関東大震災直後の社会の混乱の中で官憲に虐殺されてしまいますが、「序」にもあるとおり、生前、たびたびの投獄を貴重な読書の機会として様々な自然科学関係の書籍にも親しみ、『ファール昆虫記』の翻訳に取り組んだりしています（著者自身の監修で決定版が刊行されてまだ10年にならない。ダーウィンもファールも同時代人!?). 昆虫学者あるいは博物学者といった自然科学者とはちょっと違った視点からの仕事だったようですが、その美しい自然描写など一読の価値があるのではないのでしょうか。

本文の一部を掲載しましたが、興味を覚えた方はぜひ全文（といっても彼の翻訳は残念ながら第1巻のみに終わりました）を読んでみてください。

## 自然観察クラブの活動に思いを寄せて

北光クラブ代表 渡邊真知子

春の嵐のあとは、水面に散り落ちた花びらが名残惜しそうに流れゆく姿が見られます。

咲いてる花に愛しく手を差し伸べる人はいても、散ってしまった花に心をとめ、愛でる人はそう多くないと思います。日本人はその時々的情景や風景を言葉に託して表現してきました。水面に散った花びらが筏のように流れる様を花筏・・・と言うそうです。素敵ですね・・・。私も日常のふとしたことに目をやり、心を傾け生きていたいと思っています。

2002年学校完全五日制で、「地域はどう子ども達を受け入れられるのか」そう課題を投げかけられ、手探りでスタートしたチャレンジスクールが、地域のみなさまのお力を頂きながら、12年もの時を経て継続されてきたことは、地域の教育力と子ども達を思うみなさまのお気持ちのお陰と深く感謝しております。本当にありがとうございます。

現代社会はインターネットにアクセスすると一度に沢山の情報が広がり、未知の世界があつという間に知識として入ってきます。でもそれだけで生きてはいけないはずです。知識はそこから様々な体験をすることによって、確実なものとなって、生きるうえで大切な力を獲得できるのだと思います。そういった意味でも自然観察クラブの活動は、大人との関わりの中で子ども達が心で感じ学んでいるのだと思います。自分に関わって様々な知識や体験を与えてくれる大人がいるということはとても幸せなことですね。

私が幼い頃、小さな図鑑を片手に家族で野山を歩き、食べられる山野草を見つけては「人の知らないことを知っている」と生きることが楽しく

(次ページへ続く)

なるぞ」と祖父母に言われたことを思い出しました。あの時、図鑑を見てあれこれ話したことは40年も前のことになりますが、私の記憶の中にしっかり残っています。関わる大人の中で、子どもも知らず知らずに知識を知恵に変える力を学んでいるのだと思います。

春に吹く風の薫り、夏の夕立のあとの風の匂い、秋のやわらかな風の感じ、肌に突き刺す冬の風の痛さ・・・など風ひとつとっても人によって・・・季節によって感じ方が違います。そんなことを子ども達と一緒に感じることで自然観察クラブの活動にエールを送ると共に今後もより多くの大人や子ども達が参加してくれることを期待しています。

以前、自然観察クラブ代表の阿部良司さんがこうおっしゃっていました。「僕は観察会をやる前に何度か同じ場所を歩いてきます。その時々新しい発見があり、僕自身もいろいろなことを学べるんです。」と。こんな大人がいっぱい増えるといいなあと同時に、そんな大人になりたいと感じてくれる子ども達が沢山増えることを心から願っています。



## 会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。

また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭にあります。(無料)

確実な入手をご希望の方は、年会費(1,200円)をお納めいただければ、

ご自宅まで郵送いたします。



### 鹿沼の自然・栃木の旅 月報第12号

2013年4月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市上田町 1923

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

